発行月：2024 年 10 月
発　行：真宗大谷派　辻徳法寺

第 54 号

徳　朋

心の奥底にある私たちの欲求

二階堂　行壽

にかいどう　ゆきとし
1958－現在
東京都生まれ。真宗大谷派専福寺住職。真宗大谷派首都圏教化推進本部員

「不安はいのちそのものが、確かなものを求めているうめき」

これは、ある先生の言葉です。日々私たちは、不安が起こらない事を願って生きています。そして、自分の思いはかれる人生、自分の想定内であればいいわけですけれども、ひとたびそれに影がよぎると、つまり想定外のことが起こってくると、途端に安心が崩れ、不安、苦悩が湧いてきます。

しかしそれは、私の中に確かなものを求めたい、出会いたいという要求があるからなのだ、と。私たちの日常の思いよりもはるかに深く、本当の安心を求めたいという心があるからこそ、それに出会えていないということが、不安となる。その時その時の一時的な安心は得られたとしても、本当の意味での安心ではないからこそ、不安というものが起こってくるわけでしょう。

いま若くても、必ず老いていくことを知っている以上、それを抱える不安があります。いま健康であっても、いつどのような病に会うかわからないという不安があります。また、いつまでもこのままでと思いますが、死や別れを必ず受け入れなければならない不安があります。これらのことは、能力とか権力とか財力を超えて、全ての人に必ず起こってくる事柄です。お釈迦さまも、この苦悩に向き合われて出家されました。しかし、これはお釈迦さまだけの問題では

なく、いつの世でも全ての人が抱えている事柄であります。

老い、病み、死、そしていとしき方との別れ。その苦悩の現実と不安の中にあるのが、私たちの生きている事実であります。そして、お釈迦さまは、本当の安心とは、その日々の苦悩と不安とを抱えながらもなお、その人生を全て丸ごと受け止める眼、真のよりどころに出会うことであると教え示して下さっているのです。

不安は、真のよりどこを求めよ、というメッセージなのではないかと思うのです。

（『亡き方からのメッセージ』）

私たちは不安だらけの日々を生きていると思いますが、それは目先の事柄の解決ではなく、「人生を丸ごと受け止める眼」を求めている事の表れであるという指摘に、大きく頷かされました。（哲弘 拝）

この「徳朋」は仏教を拠り所としている方々の言葉に直に触れ、この身で感じる事を願いとして毎月作成しています。多少難しい表現もあるかと思いますが、気にせず読んでみて下さい。